

2. 共同利用研究成果

(1) 計画研究

計画 1-1

物理的および社会的知識に関する比較認知発達の研究

小杉大輔（京都大・文）

チンパンジー乳児における行為レベルの対象のカテゴリ化の可能性について調べるため、以下のようない実験を行なった。CRT モニタ(21 インチ)上に、刺激映像を呈示し、映像に登場する対象への被験体の接触反応を評価した。被験体はチンパンジー乳児 1 個体（パル：2-3 歳時）であった。刺激映像は、ほ乳類、ヒト幼児、ボールの 3 カテゴリの対象が動いている映像であり、それぞれのカテゴリにつき 6 種類の映像を用意した（計 18 種）。各カテゴリの映像を続けて 6 種類ずつ呈示した。同じ手続きの実験を 12 回、毎回 1 週間程度の間隔を挟んで繰り返し行なったが、カテゴリの呈示順はカウンターバランスを取った。実験中のパルの行動を DV カメラで録画した。この録画映像を用い、実験の仮説を知らない大人 4 名に対し、各試行においてパルがモニタ上の対象にいかに関接触したかの評価（叩く、なでるなど）、およびその接触の強さの 5 段階の評定を求めた。この評定値について分析を行なった。主要な結果として、まず、パルはボールの映像が呈示されたとき、ほ乳類とヒト幼児の映像が呈示されたときよりも有意に強くモニタを叩いていたことが示唆された。また、ほ乳類やヒト乳児の映像に対しては、対象をなでるような行為が多く観察された。これらの結果は、チンパンジー乳児がこれらのカテゴリを存在論的に区別している可能性を示唆するといえる。この可能性については今後さらに検討したい。

計画 1-2

霊長類乳児における生物学的運動の認識と複数感覚様相を統合した種概念の発達

足立幾磨（京都大・院・文）

本研究ではマカクザルにおける①生物学的運動の認識、②視覚・聴覚など複数の感覚様相からの情報を統合したものとしての種の認識について調べた。

①では、すべての光点がランダムに運動する刺激とランダムに運動する光点の中にヒトあるいはマカクザルの生物学的運動を示す光点が含まれている刺激を左右のモニタに対呈示し、それぞれの刺激に対する注視時間を測定し分析した。被験体にはケージ飼育個体・群れ飼育個体を用い、生育環境の違いを検証した。その結果、被験体はその生育環境において生後の視覚経験量が多い生物の正規運動に対して、選好を見せることが示された。これは、これまでの著者らの研究の結果をより強く確認する結果であった。

②ではマカクザル或いはヒトの音声を呈示した後に、音声に一致する種の写真と、一致しない種の写真のいずれかがモニタ上に呈示し、その視覚刺激に対する注視時間を測定し条件間で比較分析をした。被験体には集団飼育群のマカクザル乳児のみが用いられた。その結果、ヒトの顔写真に対する注視時間において、同種の音声とヒトの音声を先行呈示した条件の間に有意な注視時間の差が見られた。これは同種の音声を聞いたときに、聴覚・視覚 2 つの感覚様相からの情報を統合した同種の表象を想起したことを示唆する。この結果は前年度よりの著者らの研究結果を強めるものである。今後は、さらに個別飼育群との比較により生育環境の影響を調べる必要があろう。